

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	沈 念
論文題目	小栗康平の文学翻案		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、監督・小栗康平の『泥の河』(1981)、『伽耶子のために』(1984)、『死の棘』(1990)を対象とした映画テキスト分析を主眼とする。3作品はそれぞれ宮本輝、李恢成、島尾敏雄の同名小説の翻案であるが、本論文は映画理論ばかりではなく文学理論をはじめとする人文学の諸理論を幅広く参照し、「翻案」を作家としての小栗康平に対するひとつのアプローチとして論じている。</p> <p>序論では、翻案研究の有効性と必要性を論じ、日本映画における翻案についての先行研究をほぼ網羅的に概観しつつ、間テキスト性の視座から翻案をスタティックな定義や概念ではなくアプローチとみなす立場を確立する。</p> <p>『泥の河』を取り上げる第1章は、1950年代の大阪を舞台に子供を中心として庶民の生活を描いた映画版を1980年代初頭の歴史的・映画史的な文脈のなかに定位する。公開当時の宣伝惹句および作品評をつぶさに検討し、「古き良き日本映画」を想起させる作品としての賞賛と、ノスタルジアへの偏重や過度な美化をあげつらう酷評の双方が、本作の主題とモノクロ・スタンダードというフォーマットの使用を結びつけていることに着目する。このような同時代の批評言説の批判的な検討に立脚し、映画におけるモノクロ・スタンダードとノスタルジアの関係についてテキスト分析による論証が行われる。映画版は、小説が確かに描いていた少年の性の目覚めと暴力性を削除し、「純粋無垢な子供」を造形している。小説と映画における「視点」の使用についての精緻な分析が明らかにするのは、映画版『泥の河』における子供の表象が、ロマン主義・童心主義的な「純粋無垢な子供」イメージを踏襲するように見えながら、逃避と美化を目的としているのではなく、逆に自らの破壊を目的として構築されているということである。本作が子供の無垢な視点を通して「目を逸らすこと」を観客に許してきたのは、主人公が友人となった少年の母親の売春を目撃するクライマックスにおいて、残酷な現実を直視させるためであり、モノクロ・スタンダードは夾雑物を除き、よりよく「見る」ことを可能にする装置に他ならない。</p> <p>第2章は、映画版『伽耶子のために』を、李恢成の文学世界を通して日本映画史における既存の在日朝鮮人表象を批判する試みとして捉える。同時代の批評言説において、本作の欠点として「過度の美化」「感情移入の困難さ」「物語のわかりづらさ」が指摘された。本論文は、これらの特徴こそが、安易な接近と理解を退け、日本人による表象＝代行行為の正当性を自省するための戦略であるという仮説を立て、論証する。1984年の本作に先立つ戦後日本映画における在日朝鮮人表象は、今村昌平の『にあんちゃん』(1959)に代表される「日本人対在日朝鮮人」という二項対立の強調と、「日本人」「在日朝鮮人」</p>			

という概念の虚構性を提示してこの二項対立の打破を試みる大島渚の実験として総括される。本論文はこの2つの方向性をともに良心的ながらも在日朝鮮人の回想を日本人の「空想」によって上書きする行為として批判し、李恢成の作品世界全体との密接な対話に基づく自省的な作品として映画版『伽耶子のために』を評価する。切り返しのショット連鎖やフラッシュバックを丹念に描写・分析し、台詞やモチーフに『伽耶子のために』にとどまらない李恢成の作品世界からの広汎な引用を跡づけることで、李恢成が構築する、自らの特異性を保ちつつ多様な在日朝鮮人の複数的な経験を包含する主人公が、映画版のなかに息づいていることが示される。

第3章では、原作と映画版の『死の棘』における「ミホ」という女性の在り方を考察する。梯久美子らの先行研究が示すとおり、原作者である島尾敏雄・ミホ夫婦は、私小説の特性を利用して、「死の棘」シリーズとでも呼ぶべき一連の作品において現実と虚構を混同させてきた。さらに、原作をめぐる批評言説は島尾夫婦を「近代本土の男性」と「古代南島の女性」として造形したが、ミホ自身も「南島の巫女」というイメージに積極的に自らを重ね、現実と虚構の融合を強めることでステレオタイプの構築に加担した。映画版『死の棘』の南島を舞台とする4回のフラッシュバックは、一見したところそのようなステレオタイプを敷衍しているように見える。しかし、本論文は詳細なショット分析によって回想する主体の不確定性と回想される時空間の不安定性をあぶり出し、フラッシュバックが逆にステレオタイプの構築を揺るがしていると指摘する。同様に、夫婦喧嘩のショット連鎖の分析を通して、『死の棘』映画版が「見る男／見られる女」というジェンダー化された権力関係に亀裂を入れているという読みが提示される。さらに、夫婦と家族が「外部」に向ける視線の分析は、原作と映画版がともに、男対女という二項対立の構図を前景化しつつも、登場人物の煩悶の真の元凶として病院が具現する社会や国家のような高次の機構を指し示している可能性を明らかにする。

このように、本論文は、同時代の批評言説を検証したうえで、映画と小説のテクストをつぶさに分析することで、小栗康平の翻案という方法に光を当てた。すなわち、小栗の映画は、既存のイメージを流用しているように見えながら、原作の作品世界との緊密な対話からなる翻案という営為を通して、そのようなイメージを内破させるのである。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、これまで学術的な映画研究ばかりではなく批評においても論じられる機会が極めて限られていた小栗康平監督の映画を、文学翻案である最初の3作品に絞って分析している。小栗は、デビュー作『泥の河』が興行的にも批評的にも大成功を収めたのち、寡作ながら『伽耶子のために』や『死の棘』のように国際映画祭で高く評価される作品を撮りながらも、日本における作家主義的映画批評によって、その映画美学が周縁化されてきた。このように直接の先行研究がほとんど存在しない対象に取り組むなかで、問題設定から理論的枠組みの構築まで独自に行って成果を上げたことは高く評価できる。本論文の学術的意義は、以下の4点に集約される。

第1に、映画による文学翻案の研究として極めて水準が高い。現在、日本映画史における翻案研究の最前線は、概ね、文学・映画双方のフィールドにおける広汎な資料を駆使した歴史的・社会的文脈の研究、漫画やゲームの原作を中心としたメディアミックスやクロスメディア・ストーリーテリングの研究、ジェンダーやセクシュアリティの理論を援用するテキスト分析、の3傾向に分類される。しかし、どの傾向においても、語り手、視点、時間性について映画と文学のテキストに深く分け入って解きほぐす論考は希である。本論文は、このような先行研究の動向を踏まえたうえで、狭義の原作のみならず李恢成と島尾敏雄・ミホについては他の作品を広く参照し、文学の作家研究の知見に学び、映画・文学の物語理論をよく理解したうえで取舍選択して使用して、上述のような重要な概念について細緻かつ説得力のあるテキスト分析を行っている。さらに、小栗康平の映画の方法論として翻案を捉える視座によって、形式分析を重視する翻案研究がしばしば陥りがちな文学性と映画性をめぐるメディアム特殊性論の陥穽を回避している。また、翻案を扱うことで小栗の作家論を多様な言説や歴史的な文脈へと開いている点も特筆すべきである。今世紀に入ってから、クロスメディア・ストーリーテリングの興隆やメディア間のヒエラルキーの解体に伴って翻案は注目を集めており、本論文は映画研究のフィールドに大きく貢献することが期待される。

第2に、第1点と緊密に連動する点として、映画のテキスト分析の質の高さが挙げられる。とりわけ、第1章における主人公の少年の視点ショット構造の不安定性とその帰結、第2章の氷原のシーンにおける音響を挿入するタイミング、第3章のフラッシュバックの物語内現実における不確定性など、ショット毎に詳細な分析を施して初めて得られる結論を生み出していることは強調したい。図版の使い方も画角などの形式に細心の注意を払って適切であり、ショットや映画技法の描写においても、概ね読みやすい叙述に成功している。映画『にあんちゃん』が観客に躍動感の印象を与える理由の分析など、補足的な部分にも映画というメディアムに対する学位申請者の深い理解が現れており、それがアカデミックなテキスト分析を下支えしている。

第3に、第1点で言及した映画と文学における物語理論にとどまらず、カルチュラルスタディーズやポストコロニアリズム、フェミニズムなどの理論的文献に広くあたり、分析に大胆に使う挑戦的な研究である。その結果、議論にいささかの飛躍や強引な点、脇道に逸れる箇所が散見される。しかし、このような広汎な文献との対話は、子供の貧困とノスタルジア、日本映画における在日朝鮮人の表象、作家とその妻（もう1人の作家でもある）との相克など、原作と映画の主題が要請したものであり、本論文のスコップを広げ、叙述に厚みを加えていることは間違いない。第2章の『伽耶子のために』の分析において、李恢成による在日朝鮮人の複数的な経験がオーヴァーラップした主人公の主体性の分析など、抽象度の

高い議論が説得力をもって行われ、これまでポストコロニアリズム的な日本映画論では看過されてきた作品に対して新しい視点を与えている。

第4に、分析対象となる3作品については1980年代から90年代にかけての公開時の映画批評をほぼ網羅的に検討し、社会学や歴史学の文献にも適宜当たり、同時代の映画作品も参照して、歴史的・映画史的な文脈の再構築に概ね成功している。

とはいえ、第1章を除いて、小栗作品の構築する観客性や具体的な社会的グループに属する観客（例えば女性や在日朝鮮人）の問題がほとんど論じられていないこと、「不純な視点ショット」をはじめ、説明が不足している用語があること、『泥の河』と『伽耶子のために』の間に起こった小栗の映画の変容について考察されていないことなど、今後の課題はある。結論部では、翻案以外を包括した小栗の映画世界に翻案という方法が与えたインパクトについても論じる必要があるだろう。

しかしながら、明確な問題意識に基づき、精緻なテキスト分析によって論証を重ねる本論文は、正確な日本語で明晰に書かれており、日本における映画研究に資する力作である。

よって、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、2022年1月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降